佐竹義輔*: 早田先生を偲ぶ

Yoshisuke SATAKE: Memories of Prof. Bunzo HAYATA

早田先生に私が師事したのは昭和2年4月であつた。当時，中期を終えた学生は後期になると専攻科目を選んで卒業論文を書かなければならなかつた。もともと私は，植物が好きで植物学科に入つたわけではない。何を専攻してよいかわからない。いろいろ迷つたが即物的な分類学をやることにした。恐らく，心の底には学名に author name がつくことに魅力があつたのだろう。後から考えれば，分類学のいかなるものかよくわかつていない浅はかな考であつたが。

そこである日，早田先生の研究室に伺い，分類学を専攻したいから御指導を願いたい，と恐る恐る申しでた。先生はしばらく考えていたが，「二つの方向がある。一つは足による研究——即ちフロラか地理学的研究で，体力と財力がいる。もう一つは実験室にこもる研究——即ちモノグラフか解剖学的研究で，根気と細心がいる。どちらをとるか，君の条件に適した方を選ぶがよい」といわれた。どちらも自信はない。しかし，財力という条件はどうにもならなかつたので，後者をとることにして，弟子入りを許されたわけである。同級の御江久夫君もやはり早田先生につくことになり，彼には Polyporaceae の分類を，私にはイラクサ目の spodogram (灰像) の分類学的価値というテーマが与えられた。まがりなりにも卒業論文をまとめ，昭和3年3月卒業し，4月には副手を命じられた。それから先生の死まで6年間教導をうけ，また先生の研究や講義の手伝をした。

先生の学究生活は30年にわたる。今その業蹟をふりかえつてみると，およそ前期，後期の二期にわけることができよう。前期は1903～1920年前後，後期はそれ以後となる。

前期においては台湾植物の開明に専念し多数の新種が記載され，タイワンスギ属その他分類学上興味ある新属が発表された。そして台湾植物図譜10巻が完成された(1921)。先生は，台湾植物の研究中，どうしても台湾と関係の深い印度支那の植物を調査する必要を痛感し，台湾総督府を動かして，大正6年(1917)と大正10年(1921)に印度支那にわたり植物資料を採集した。第3回の調査を計画し費用支給の見込がついたが，先生の健康が実行を許さなくなつた。どんなに残念であつたか推察できる。自分は行けなくなつたが，少壮学者は，自分の仕事をついで遂行して欲しいという要望書を発表した。「大陸の学術調査を行なわれん事を少壮学者に望む」がこれである。これをみると，大陸の学術調査の必要性を詳説し，このような仕事をする人は，(1) 天才の人より修養の人であること，(2) 語学に堪能であること，(3) 数学に堪能であること，(4) 絵画を能くすること，(5) 植物に愛情を持つことの条件を充す人でなければならない。植物分類学

---

*国立科学博物館. National Science Museum, Ueno, Tokyo.

は数字の嫌いな人でもやれると考えるのは大きな誤りである。若い学者は何かというと「金がない」とか「やらせてくれない」というが，私の経験では「金はある」「やらせて貰える」と思う。学者に「身命を愛せずして，ただ無上道を歩む」決心がないのだ。一と度この決心がつけば，金は天から降つてくる，必ずやらせて貰える，と説いている。この時先生は 49 才であつた。意気まさに天をつくとはこのことであろう。これを読むと私などはただ冷汗をかくのみである。その後，日本の海外発展にともなつて，種々の学術調査が行われるようになつたが敗戦によつて中断されてしまつた。幸にも最近国力の回復とともに再び国外の学術調査が行われる気運に向い，植物関係でも，京都大学のカラコラム・ヒンズークシ調査その他が実現し，近くは東京大学のシッキム地方の植物学調査が実施されるときくが，早田先生の念願がおそまきながら有能な少壮学者によつて遂行されることはまことに喜ばしいことである。

さて，後期になると，先生の研究方向は全く変つてしまつた。台湾フロラの研究，印度支那の植物調査をしているうちに，従来の分類体系に大きな疑問をいだくようになり，これを深く思索し掘り下げたのが「動的分類系」となつて現われた。東洋学芸雑誌 36 巻 (1920) にはじまり，植物及び動物，2 巻 (1934) に終るまで十数回にわたつて内外の雑誌にその独自の体系を提唱した。また一方，分類学の特徴として，体制とくに中心柱の構造，葉の構造要素の相違など価値あるものと考え，その研究に没頭するようになつた。私が先生に師事したのはちようどこの後期の半ば頃に当る。先生の研究室には「のみと小刀」によつて掘り出されたシダ類の中心柱がたくさんアルコール漬になつて並んでいた。昭和 3 年 8 月，日光植物園に約 10 日間先生と共に滞在し，日本産球果植物の葉の解剖分類学的実験の助手としてプレパラートをつくること，顕微鏡図の作製をやらされた。昭和 4 年 8 月も同様に顕花植物の中心柱の研究のために，サクラソウ属 3 種，オウレン，オサバグサ，ベニバナイチヤクソウ，ミヤマカタバミ，ダイモンジソウ，その他数種の根茎の切片づくりと顕微鏡図の作製をやつた。謹厳な先生との生活は息のつまるものがあつた。しかし，研究に対する先生の信念，情熱，態度というものを身を以て教えられたのである。百の訓辞や説教より無言の教訓にまさるものはない。

あたかも，昭和 5 年 8 月に英国で第 4 回万国植物学会が開催される様になり，準備委員会は先生に副会長の椅子を予約してきた。先生は喜んで出席することにしいろいろ準備していたが，日光滞在中も暇さえあれば，英語のレコードをかけて会話と演説の練習をしていた。普通の人だつたら，弟子の前でこんなことはできるものではない。何事も先生は徹底主義であつたらしい。研究に必要なものは図書であれ，器具であれ，惜しまず金を使う。酒も煙草も，他の娯楽も身をたのしませるものは何もない。すべて研究本位であつたといえよう。この意味では，先生の家庭は所謂幸福ではなかつたかも知れない。これについてここでとやかくいうべきではないが，少くとも学者の本質的態度というものを私は早田先生から学んだと思つている。

昭和4年9月，先生は不幸にも心臓病の発作におそわれた。渡英はおろか，研究も断念してひたすら病を養う身となつた。小康を得ると，居を植物園の近所に移し，翌年の半ば頃から講義をつづけ，かたわら植物分類学の著述に苦心するようになつた。私はよく，講義や著作に必要な図書資料をもつて，病室と教室の間を往復したものだが，万年床の上に小机をおき原稿をかいている先生の姿を見ると，まさに学問の鬼であつた。「気分のよい時に仕事をするのだ」というが，仕事をするために身心をせめさいなんでいるようにみえた。しかし，植物分類学第一巻裸子植物篇はついに完成し，昭和8年6月出版された。日本におけるこの種の第一の名著といつても過言ではない。つづいて第二巻の出版をわれわれは期待したが，遂に再び立つことができず，昭和9年1月13日，60年の生涯を閉じてしまつた。思えば，病中の過労が先生の死を早めたことは明かである。そうせざるを得なかつた先生の胸中を察すると暗然たらざるを得ない。

先生がこの著述を計画したとき，第二巻被子植物篇，第三巻羊歯植物篇，第四巻蘚苔植物篇第，五巻藻菌及び下等植物篇の大抱負だつたが，すでに身体の限界をさとり「もし自分が中途で斃れることがあつたら，あとを引受けて完成して貰いたい」と本田博士に依頼されたときいている。幸い，第二巻の原稿はほとんど完成していたので，本田博士の手で整備され，総論として昭和10年2月に世にでた。これは先生の遺志をつぐ唯一のものである。先生が没してから，この1月13日で満26年になる。その間，私は何をしたというのだろう。顧みて忸怩たるものがある。

□ **B. Hayata : An interpretation of Goethe's *Blatt* in his "Metamorphose der Pflanzen", as an explanation of the principle of natural classification** (Icon. Pl. Formos. **10**: 75～95, 1921) よりの抄出

Since my return from Tonkin (Indo-China), in August 1917, I have been reflecting on the principle of natural classification......Current opinion demands that natural classification be based on the evolution theory, ... I have come to entertain strong doubts as to the correctness of this principle, so generally accepted by modern systematizers; for my twenty years' experience in systematic botany has steadily led me into quite a different channel of thought. This I now venture to make public, although I am aware that it will meet with a great deal of opposition. ...... When we interpret, on the contrary, the *Blatt* or *Urpflanze* as a real entity, then the changes of organs or species are different in their courses according to the time and circumstances, and therfore are indeterminable and dydamic. ...... the view of manifold interrelation of organs or species, ... The principle of natural classification should be founded......on the participation theory, the dynamic system, and the manifold views of the mutability. (津山　尚)